

屋の部

解説 (あらすじを中心に)

義経千本桜

椎の木の段

口	竹本 聖太夫	権太倅 善太	吉田 玉
	鶴澤 清 允	権太女房 小仙	吉田 蓑一
		主馬 小金吾 武里	吉田 文哉
奥	竹本 三輪太夫	六代 君	吉田 和馬
	鶴澤 寛太郎	若葉の内侍	吉田 紋秀
すしやの段		いがみの権太	桐竹 勤十郎
前	豊竹 呂勢太夫	娘 お里	吉田 清五郎
	鶴澤 清 治	弥左衛門女房	桐竹 勤十郎
		弥助実 平維盛	吉田 文志
切	豊竹 呂太夫	すしや弥左衛門	吉田 文志
	鶴澤 清 介	梶原平三景時	吉田 文志
		村の役人	吉田 文志
後	豊竹 希太夫	軍兵	吉田 文志
	鶴澤 清 志郎		吉田 文志

豊竹 希太夫

(人形役割)

唯子 望月大明藏社中

夜の部

解説 (あらすじを中心に)

桂川連理柵

六角堂の段

豊竹 巨太夫	女房 お絹	吉田 勘
鶴澤 清 公	弟儀 兵衛	吉田 勘
	丁稚 長吉	吉田 勘

(人形役割)

豊竹 芳穂太夫

帯屋の段

前

豊竹 藤太夫	母 おとせ	吉田 蓑一
竹澤 宗 助	女房 お絹	吉田 勘
	親 繁 齋	吉田 勘
	弟儀 兵衛	吉田 勘
	帯屋長右衛門	吉田 勘
	丁稚 長吉	吉田 勘
	娘 お半	吉田 勘
	下	吉田 勘

(人形役割)

豊竹 芳穂太夫	娘 お半	吉田 蓑紫郎
竹本 小住太夫	帯屋長右衛門	吉田 蓑紫郎
豊竹 薫太夫		吉田 蓑紫郎
鶴澤 清 旭		吉田 蓑紫郎
鶴澤 清 公		吉田 蓑紫郎
鶴澤 清 方		吉田 蓑紫郎

道行籠の桂川

(人形役割)

お半 豊竹 芳穂太夫	娘 お半	吉田 蓑紫郎
長右衛門 竹本 小住太夫	帯屋長右衛門	吉田 蓑紫郎
		吉田 蓑紫郎
		吉田 蓑紫郎
		吉田 蓑紫郎
		吉田 蓑紫郎

唯子 望月大明藏社中

義経千本桜 椎の木の段・すしやの段

平家は滅亡。しかし、その嫡流、平重盛の子の維盛は生きていて、高野山へ入ったとの噂。京郊外に身を隠していた御台所は幼子を連れて高野山をめざし、偶然にも吉野で夫と再会。維盛は、かつて重盛に恩を受けた鮮屋の弥左衛門に匿われ、奉公人に身をやつしていました。とは知らずに愛し、夫婦になるつもりでいたのが、この家の娘お里。思いもよらない現実が明らかとなり、こらえられない涙。

一方、兄の権太は、ゆすり、かたりも日常茶飯事の悪党。鎌倉から詮議に来た梶原景時に、討ち取った維盛の首と、捕らえた御台所、若君を差し出し、褒美の金を要求。忠義をほめ、梶原が去るや、激怒して、息子を刺す弥左衛門。

ところが、維盛一家は無事。首は維盛ではなく、連行されたのは権太の妻子でした。維盛の存在とその危機に気づき、これを機に心を入れ替えようと一念発起した権太。大きな犠牲を払って、みごとに梶原をだまし、維盛を救うことができた—と思いきや、昔、重盛に命を助けられた頼朝には維盛を殺す気などなく、出家させるのが望みで、梶原は偽首と知りつつ受け取っていたことが判明。だまされていたのは自分の方だった。権太は、今こうして命を落とすのも、これまでのかたりの報いと悟って、悪事を悔い、絶命。維盛は、誓を切り、妻子と別れて高野山へ…。

並木千柳・竹田出雲(二代目)・三好松洛合作、浄瑠璃三大傑作の一つに数えられる五段続きの時代物で、延享4年(1747)、人形浄瑠璃全盛期に大坂の竹本座で初演されました。「平家物語」の中の、都に残した妻子を恋慕いつつ、戦場を去って高野山で剃髪、那智の沖で入水した維盛の物語を題材として、奈良県吉野郡下市町の老舗「つるべすし弥助」を舞台に一家の悲劇を描き、愛しい妻子を犠牲にした権太の悲しみが胸に迫る三段目をお届けいたします。

桂川連理柵 六角堂の段・帯屋の段・道行籠の桂川

帯屋長右衛門は、24歳も年下の隣家の娘お半と関係。旅先で、夜中、いやらしい丁稚から逃げて来たお半を、まだ子供だと思って自身の蒲団の中で寝かせてやったのが、間違いのもと。しかも、お半は妊娠。恩のある隣家、妻にはもちろん養父にも顔向けできない、取り返しのつかない過ちに、自らを責め、苦しむ長右衛門。それに対し、お半は、妊娠に悩みながらも、小さいときから大好きだった長右衛門以外、夫を持つ気などないとのこと。

このスキヤダルを利用して、長右衛門を店から追い出そうと企むのが、養父の後妻とその連れ子。店の金をくすねて、罪を長右衛門になすりつけ、旅先での関係を記した長右衛門宛のお半の手紙を読み上げて、長右衛門を窮地に。

それを救ったのは妻と養父。けれども、長右衛門がお半のことを苦にして自害するのではないかと、不安でなりません。どうか死なないでほしい、二人の切なる願いを聞けば聞くほど、辛さが増す長右衛門。死んで詫げるほかない問題をさらにもう一つ抱えて、すでに死を覚悟していたのです。

この恋を思い切る、そう伝えて去ったお半が残したものは、桂川に身投げするとの手紙。15年前、桂川で芸子と心中するつもりでいながら、芸子の身投げ後、気が変わって死ぬのをやめた長右衛門は、芸子がお半に生まれ変わって死へと招くように思われ、桂川へ…。

普專助による上下二巻の世話物で、安永5年(1776)に大坂の北堀江市ノ側の芝居で初演。題材は、1761年に京都の桂川で年齢差のある男女の死体が見つかった事件で、真相は不明ですが、一月後に心中として人形浄瑠璃化され、その後、宮園節の歌謡になり流行しました。

ご覧いただく下巻のうち、「帯屋」では、後半の養父、妻、長右衛門それぞれの思いやりに満ちた真情吐露が聞きどころ。後妻親子が派手に動く前半の丁稚との抱腹絶倒のやりとりも、ぜひお楽しみください。道行は、原作にはなく、のちに宮園節から取り入れたものです。

◎字幕表記がございます。席によっては字幕が見えにくい場合がございますので、あらかじめご了承ください。  
 ◎出演者の急病やその他やむを得ない事情により、代役もしくはは演目を変更して上演する場合がございます。あらかじめご了承ください。  
 ◎上演中、客席内での写真撮影録音ならびに携帯電話スマートフォン・タブレット等の使用は固くお断りいたします。また周りのお客様の妨げになりますので上演中はお持ちの携帯電話・スマートフォン・スマートウォッチ等は電源をお切りになるか音光振動の出ないように設定をお願いいたします。  
 ◎観劇時は咳エチケットの励行ならびに、手洗いなどの感染症対策にご協力のほどお願い申し上げます。